

■ 書 評



うつ病の論理と臨床

神庭重信 著
弘文堂

2014年9月 242頁
本体価格 3,000円+税

本書は、うつ病の実臨床に深くかかわり、その生物学的な基盤の解明を目指した著者の「何故」を問い続けた思索の軌跡である。そこには「経験的蓋然性をもった病態構造モデル」を求め続ける科学者の営為、仮説を立証しようとする日々の思索と強い意志が感じられた。著者の臨床に対する姿勢には、うつ病という疾患名を通り一遍のラベルにしないという、常に自らの臨床を対自化する内省力がうかがえた。

第一章では、下田の執着論の現代的解釈を行い、著者の分子生物学および行動遺伝学的な深い知識を通して下田理論が生き生きと我々の目の前に蘇った。「執着気質」を現在の分子生物学および行動遺伝学の視点で読み解くのみでなく、九州大学精神医学教室に残された豊富な資料を猟捕し、下田理論の発生・完成・その後の発展・海外の性格論との比較検討など豊かな知識と深い知的好奇心に支えられた論考であった。第二章では、進化心理学の知識を基に、メランコリー：うつ病の発症の生物学的なモデルを検討しており、疾患の生物学的な解明をめざす著者の志の背景が間接的な形で具現化された章である。またその章の補遺において社会行動の生物学的な基盤について検討し、うつ病の遺伝子-環境相関についての思索の結果を示している。こころと体の対話、養育環境と脳の発達などは著者のここ10年間あまりの大きな関心であり、本章は著者のうつ病の成り立ちに対する現時点の著者の一定の答えとなっている。

第三章は、うつ病の本質に迫る論考である。今回 DSM-5 においても大きな議論の焦点となったうつ病診断の中に内包される異種のうつ病を DSM-III に遡りどのような理由でいわゆる非内因性うつ病が内包されたかについて検討し、神経生物学的な視点から論考している。すなわち、非内因性うつ病と内因性うつ病は質的に違いがあるのか、単に量的な違いなのか、非内因性うつ病に神経生物学的な変化が起きていないのかという問いに発し、現時点で生物学的精神医学は答えを出していないことを示した。現代日本におけるうつ病や自殺の増加は大きな社会的な問題であるが、それらの背景にうつ病を予防する文化装置の喪失を指摘し文化神経科学からうつ病への接近を試みている。第四章では、第三章の文化神経科学的な接近を詳細に記述している。多様化するうつ病の病像を対象に時代精神とうつ病の

多様性について論考している。文化が脳にどのような影響を与えるのかという問いに最新の神経科学からの接近を紹介している。そこに紹介されているさまざまな理論によって集合主義の縦型社会から個人主義の横型社会への急速に移行しつつある 1990 年代以降の日本社会におけるうつ病の病態が論考される。1990 年代以降の集合主義の「結果としての平等」から「個人主義の諸条件の平等」に基づく競争へ急速に移行しつつある日本において社会制度を底支えるマナーや文化装置が追い付いていないことを指摘し、これらがうつ病の発生にどのように関与しているかを検討している。その検討においては知覚注意機能の文化差・社会認知の文化差・遺伝子と環境の共振化などについての科学的な知見が豊かに提示されている。

第五章では生物学的立場から臨床病理学を問うと題し、第六章では、うつ病の精神病理学と題し、臨床精神病理学への生物学的精神医学の大きな期待が述べられている。生物学的な研究の現時点での到達点が第五章では述べられ、DSM-5 が大うつ病の中に内包する異種性を強く指摘されながらも大うつ病の疾患分類に代わる新たな疾患分類を提示することができなかったことを臨床精神病理学の現時点での限界とし、臨床精神病理学が操作的な診断分類を超える新たな疾患分類体系を作り上げていくことへの期待を述べている。期待される臨床精神病理学のアプローチの一例として笠原・木村分類を引用し、詳細な再考からその上に生物学的精神医学からの試論を示している。

第七章は精神科診断のための面接とうつ病の初期面接であるが、ここには著者の生き生きとした臨床経験が述べられている。臨床における真摯な姿勢を支える学術的な誠実さがうかがえる。第六章までの論考がいずれも原著、成り立ちにまで遡り、解釈・私見を述べていたように、ここでは患者自身・病む者の苦しみという原点に常に立ち返り内省する臨床家の姿が浮かび上がる。第八章は、抗うつ薬の薬理学とうつ病の薬物療法と題し、著者にとっては自家薬籠中の論説を展開している。各々の抗うつ薬の説明を具体的にわかりやすく臨床症状と結びつけ生き生きと語られている。

第九章は、うつ病の生物学-モノアミン仮説を超えた展開一と題し、うつ病における複数の最新の生物学的な研究・仮説をより広い読者に向けてわかりやすく解説している。

本書は、うつ病について、精神病理学的な知見を視野に入れ、かつ多様な学説を著者の深い精神医学全般への洞察に基づいてまとめあげた秀逸の一冊である。本書が、生物学的精神医学、精神病理学などの立場を超え生物学精神医学のトップランナーである著者によって書かれたことそのものが本書の存在意義を稀有なものとしている。うつ病に向き合う医師には必読の書である。

(齊藤卓弥)